

書籍紹介

『シリア・レバノン・イラク・イラン』 末近浩太編著、ミネルヴァ書房、

2021年2月28日

本書は「中東政治研究の最前線」（中村覚監修）シリーズの第2巻として出版されたもので、本格的な地域研究の成果でもあり、今日の複雑な中東情勢の背景を理解するためには、他所では見られない重厚な研究書である。

序章「中東に生成される新たな「地域」」を末近浩太、第1章「イラン・日本関係」を千坂知世、第2章「多元主義—レバノンにおけるメディアの発達と分極化の進展—」を千葉悠志、第3章「国家社会関係—シリア内戦がもたらした希薄化と親和化—」を青山弘之、第4章「政軍関係—IS後のイラクの分断と奇妙な安定—」を山尾 大、第5章「選挙—イラン・イスラーム共和国と「公正な選挙」の必要性—」を坂梨 祥、第6章「安全保障—全方位提携論とレバノン—」を小副川 琢、第7章「外交—シリア内戦に見る米国霸権の黄昏—」を溝渕正季、第8章「治安—イスラーム過激派の越境移動の論理とメカニズム—」を高岡 豊、第9章「政治と経済—経済戦略から見るイラク・クルディスタンの独立問題—」を吉岡明子が、それぞれ担当するという政治研究を専門とする錚々たる研究者が終結して構成した論考である。

複雑に絡んだ相互関係をもつこれらの国々は、近年、急激な政治的変動の中で苦闘している。本書は今現在、生じている問題、内紛や対立、経済的苦悩などを簡単に解説するものではないが、今後にも生じる可能性のある諸問題の背景を丁寧に説明することによって、今後の中東諸国の相互関係や政治的経済的諸問題を理解するための必読書ともなっている。

『宗教復興と国際政治—ヨルダンとイスラーム協力機構の挑戦—』 池端蘿子著、

晃洋書房、2021年2月28日

本書は博士課程を修了したばかりの若い研究者の博士学位請求論文を加筆修正したものであるが、若々しい感性にあふれた文体に、これまでのしがらみにとらわれない斬新な発想によって、新しい「宗教復興」の議論を展開するものである。特にイスラーム過激派などの活動によって、宗教復興が否定的にとらえられる傾向がある中で、ヨルダン・ハーシム王国という独自の性格をもつ小さい王国を対象としたことは、興味深い議論展開を導いている。

ハーシム家はもともと預言者ムハンマドの一族に属していて、ムハンマドの末裔という立場を堅持している。ハーシム家はムハンマドが632年に死去したのち、近年までマッカの太守として聖地を守護していたが、1917年に太守フサイン・ブン・アリーがアラブの統

一を目指して「アラブの反乱」を起こしたが成功せず、1923年にイギリスの委任統治下でトランシスヨルダン首長国が成立した。その後、1946年5月に現在のヨルダン・ハーシム王国として独立した。この「アラブの反乱」にイギリスの情報将校としてフサイン・ブン・アリーに付き添って後方攬乱を担ったのが「アラビアのロレンス」と呼ばれたトマス・エドワード・ロレンスであったが、本書にはロレンスについては何も説明されていない。

ともかく、ハーシム王家はイスラームにおける聖家族の一つであるとしても、ヨルダンという地縁のない土地で、小規模ながらも王国を築き上げていく過程には、多くの発想の転換が必要であった。この点について、本書では、イスラームを軸にして国内を取りまとめ、イスラーム国家としての政治的統一を試みる姿勢を詳細に検討している。北にシリア、東にイラク、南にサウジアラビア、中東でも特に軍事的脅威を放つこれらの独裁国家に包囲され、西にパレスチナ、その背後にはアラブの大敵イスラエルが控える、地政学的にきわめて困難な地域に位置し、国内には天然資源も乏しく、これと言った産業もない。しかし、そのような荒地に国家の命運を託する国として生き延びるには、巧みな全方位外交に成功する以外に方法はない。それにもかかわらず、ヨルダンは内政にも外交にも、バランスのとれた政治を行っている。2011年に発生した中東での民衆蜂起にもうまく立ち回って、今日まで立憲君主国として安定した政治が行われている。

このようなヨルダンの危うい安定の謎を著者は「イスラームの連帶」を巧みに取り込んだ宗教政策に求めている。ここには、中東地域だけでなく、世界の国々の安定を図るためのヒントが見つかるかもしれない。中東政治については、ともすれば複雑に絡み合った戦略に目を奪われてしまうが、本書は読みやすい文体で重要な視点を簡明に教えてくれる参考書である。特に若い人たちに読んでほしい。



『宗教の意味と終極』（ウィルフレッド・キャントウェル・スミス著、保呂敦彦・山田庄太郎訳、国書刊行会、2021年3月25日）

ウィルフレッド・キャントウェル・スミス（1916–2000）著の本書は全9巻本として翻訳出版が進んでいる『宗教学再考』の第8巻であるが、最も早く翻訳・出版されたものである。全9巻の中で扱われているのは、1880年代から1980年代までの、西洋宗教学の基盤を築き上げた碩学たちの重厚な業績を、大御所的な編集委員を揃え若手の研究者と組み合わせた陣容で、翻訳し解説を付けて出版するものである。

宗教学を学ぶ学生・研究者の誰でもが、一度は苦心しながら読んで考えさせられ、衝撃をうけた経験のある著作類であり、改めて読んでみると、若いころに受けた刺激と影響とは異なった、熟練した柔らかい思考とその鋭い分析力が、年月を経ても衰えない威力をもって迫ってくるような緊張感も覚えるはずである。

本書『宗教の意味と終極』（原題 *The Meaning and End of the Religion: A New Approach to the Religious Traditions of Mankind*, 1963）は1991年のリプリント版に収録されているジョン・ヒックの序文も追加している。スミスとヒックには学問上の緊密な関係があり、二人ともに、キリスト教世界で熱心なクリスチヤンとして生涯を過ごしながら、他宗教、特にイスラームについて偏見のない立場で比較検討し、宗教の相違によって、人々の精神が分断されることのない世界を目指した点であろう。「宗教多元主義」を提唱したヒックについて、スミスは良き理解者であると同時に厳しい批判者でもあったといわれる。しかし、スミスの批判はヒックの理論を修正し補強する役目もはたし、スミスは「宗教多元主義の父」と評価されることになった。

カナダのトロントで熱心なキリスト教徒の家庭に生まれたスミスが、イスラーム研究者としての名声を得るきっかけは、17歳の時に家族と半年間、エジプトに滞在した経験による。その後、スミスはトロント大学で近東の言語と文化を学び、イギリスのケンブリッジ大学で神学を学ぶ。その後、カナダ海外伝道会議の代表としてインドのラホールに赴任し、処女作『インドにおける現代イスラーム』を著した。その後はアメリカへ移り、プリンストン大学で学び学位も得た。その後、彼は若くしてカナダのマギル大学で比較宗教学講座担当の教授に就任し、ここから安定した研究活動を展開することになる。

スミスは膨大な著作を残しているが、そのうち4冊が邦訳されている。いずれも重厚で分厚い著作であり、深い思索のうちに著述されたことが理解される。しかし、訳文自体はそれほど難解ではなく、十分に読み進むことができる。本書が出版されるちょうど半年前にハーヴァード大学で直接スミスに師事した中村廣治郎（東京大学名誉教授）の翻訳で『世界神学を目指して』（明石書店、2020年6月）が出版されている。こちらも非常に重要な文献である。

スミスは、この両方ともに、イスラーム理解について、かなりのページを割いていると同時に、ヨーロッパの哲学、特にスコラ哲学がイスラーム哲学の影響を受けて成立したこと

とを明らかにしている。わが国の西洋史や西洋哲学の専門家が、中世のイスラーム文明の恩恵について、否定するか無視するかのどちらかであり、少しも触れようとしないことと比較すれば、スミスの世界神学は、ジョン・ヒックと並んで平等な姿勢で世界の宗教を研究し解説した学者として、まさに先見の明のあった大碩学であることが明らかになる。

本書と『世界神学を目指して』は、大部の翻訳書であるが、中東・イスラームの文化や宗教学を学ぶ人たちにも勧めたい、貴重な学術図書である。



『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎—』(塩尻和子著、明石書店、2021年3月20日)

本書の要約は本ホームページの2月号に「解説」として掲載したが、出版は2021年3月になった。本書はイスラーム文明を専門的に解説した学術書ではないが、イスラーム文明とヨーロッパ近代文明との関わりと、現代科学技術の礎について分かりやすく説明したものである。私たちが日ごろから、ヨーロッパ由来のものだと思っている科学技術や文化・思想、料理、礼儀作法、音楽などのほとんどすべてが、イスラーム世界からもたらされたものであることを知る教養書である。

イスラーム文明とは、約800～1000年間にわたって、当時の世界で最も知的完成度が高く、イスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ゾロアスター教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒たちが、人種や宗教の枠を超えて、ともに協力して関わった融合文明である。この文明はイスラーム世界で展開したが、ヨーロッパにルネサンスの種をまき、近代科学をもたらし、現在の私たちの生活の中にも生きている、眞の意味でのグローバルな文明であった。しかし残念なことに、21世紀の現在、無視され、誤解され、挙句の果てに

故意に消された文明である。

イスラーム文明は、8-9世紀当時のイスラーム世界に流入したギリシアの文化遺産がイスラーム世界でアラビア語に翻訳されて大いに研究されたことによって発展したものである。その学問や文化はイスラーム勢力のイベリア半島への進出に伴ってアンダルス地方で盛んになり、11世紀以降はトレドがイスラーム文化の西方での拠点としての機能を担った。そこではアラビア語文献がラテン語に翻訳され、中世ヨーロッパの文化に大きな影響を与え、今日の科学技術と文化の礎となったのである。イスラーム文明の歴史から、宗教、人種、言語などを超えた、多くの人々の共同作業によって今日の科学技術が成り立っていることを学ぶと、今日の世界で最も不足している「人類の平和的な共存と協働」の重要性を教えられる。